

## オランウータンの国（59・10・27）

—サンダカンの生活—

吉井 良三（昭10理乙）

ただ今ご紹介に与りました吉井でございます。先程はアジアの乾燥地帯のお話でしたが、今度は世界有数の湿润地帯のお話で、極端から極端へとということになります。

これからのお話は一つの実験報告でございます。実験というのは大学を定年退官した後仕事を続ける人、あるいは私学に行かれる人、教育に従事する方がおられるのですが、型を破って海外に行ったらどうなるか、こういう実験を自分で計画しました。その報告でございます。

この実験が成功であったか、不成功であったかは夫々皆様が私の話を聞いていただいてご判断願います。自分では判断出来ませんので。

同じ時期に三高を出て、もう一つの実験をしているのが農学部出身の川口桂三郎氏でございます。バンコックにあります。バンコックは日本人が何千人といふ、東京都成田区バンコック町ですが、こちらはボルネオのサンダカン、日本人は多い時で百三十人、今は六十人位です。そこ

から京都へ高槻間位の距離の所に実験所があり、森林研究所と申します。そこで足掛け六年生活して来た訳でございます。

この地図によりますと、ここがホンコンで、サンダカンはその真南より一寸東にズレている。ですから日本からはあまり西へズレてはいない。シンガポールはここです。このボルネオ島の一番北の部分をサバと言つてマレーシア領です。その隣のサラワクを含めて東マレーシアという名前になっています。友達に東マレーシアのサンダカンに行くと手紙を出したら、マレー半島の東海岸を地図で調べてもサンダカンという町は無い、何処へ行くんだと聞かれましたが、東マレーシアというのはこちらのボルネオ島でございます。

先日フランス人の娘が遊びに来まして、彼女はパリ大学で日本語を勉強して相当に出来るのですが、京都の町を歩き疲れて、道が解らなくなつて、巡査に「今日は、お巡りさん」と問いかけたら不思議な顔をされたそうです。その言葉が時代がかつてゐるからですが、私の滞在もそういうことであつたと思うのですが、その所はご勘弁願ひます。

事の始まりは一年前に調査に参りました時に森林研究所を訪ねたところ、うちにも昆虫学者が欲しいのだが誰も無くて困つてゐる、来てくれんかと言つた話があつた。それが始まりで、日本国際事業協力団——外務省の外郭団体ですが——から行くことになりました。

行つて見るとかなり立派な研究所で、セクションも造林、植物分類、木材加工、その他合計七

つのセクションがあり、その中の一つが昆虫でございまして、そのヘッドになった訳ですが、結局、日本人は私一人あとは英人のヘッド二人、彼等はエコロジ、植物の生態をやっておりますが、それ以外は中国系の華僑であります。したがって技術者は華僑が主で、そういう連中と同僚になって何とかやって来た訳でございます。

サバの面積は北海道位、人口はその $\frac{1}{3}$ 位の所ですが、どういう訳で日本人の昆虫学者が欲しいのかといいますと、とにかくここは木材の輸出国でございまして、主にラワン材を、主に日本に（八割位）輸出しております。ところがだんだん自然林が無くなって来て、先細りになり、後五、十年で種切れになる。山林の面積は決っており、石油の様に別の所を掘ればまた湧いて来るということはありませんので、何とかせにやいかん。造林を始めようということになった。

ところがそれには熱帯造林の知識が必要になる。熱帯造林についてはヨーロッパはアフリカでかなり経験があるが、ボルネオのような、こういう湿润地ではノウハウがございませぬ。まず何を植えてよいか分らない。僅かに判っているのはチーク材でございしますが、これはタイのように、乾季と雨季がハッキリしている所でないとは適地ではございませぬ。ボルネオでは駄目なんです。それで、まず、どういう木が宜しいか、それから、それを植えますと一斉に林になりますのでそれに付く害虫が大発生致します。それを何とか防除せねばならぬ。そう言う所へ飛込んだ訳です。日本と違って、周りの木は訳の分らん木ばかりでどの仲間のものやも分らない。況やそれに付

く虫は日本と共通のものが無い訳ですので全くのブランクから始めたような次第です。

まず害虫が出てくると名前を調べ、その生活史を調べまして、それから弱点を掴まえて防除する、ということが先決でございますが、何も彼も分らんずくめで、始め半年は全くボンやりしておりまして。アアでもないコウでもないと言う状態が続きました。

さらに先方は勝手なことも言ってきた、最初、造林地へ調査に行った時には象の害を何とかしてくれんかと言う。造林して三、四年生位、人の背丈位の造林地へ象が夜入って来て、一面白半分に木を引抜いて困る、象の害を防ぐ方法は無いかと言うのです。

私は昆虫学者で象は相手にするには一寸大きすぎるのですが、どちらも生き物だから何とかしろと言うことになりました。偶々中国の正月に際して爆竹をやっている。それを買込んで造林地の中の道をジープで走りながら夜中に爆竹をバンバンやりました。営林署の連中は始めは夜働くのはこわいとか、嫌だとか言っておりましたが、その中に象が出なくなった頃にはもつとやらせろと言いつつ笑話のような一幕も始めにはありました。

現地はもともとご承知のようにラワン材の本拠ですので、ラワン材になる木を植えたら良いのでは無いか、簡単な話では無いかと思われませんが、これが実は不可能なのです。まだ成功しておりません。もともとラワンというのはフィリピン方面の土語で森という言葉らしい。ヨーロッパ人が、あれは何だと聞いたたらラワンだと答えたので、生えている木の名前だと思ってラワンという

名前にしたらしいのですが、学問的にはディプロカーパシー、日本語ではフタバガキ科と申します。これは東南アジアからインドの北の方、ヒマラヤの多雨地帯に分布しているグループで、物凄く沢山の種類があり、サバだけで二百種類あります。インドではこの樹をサル(SAL)と申しまして、沙羅双樹の語源であります。

フタバガキは大きな種ができ、それに羽が二つ生えているのでフタバガキというのですが、二百種類もあるのならその中から適当な物を選べば良いでは無いかということなのですが、実はうまく行かない。何故かという、花が毎年は咲かず、五、六年に一回一斉に花が咲いて、一斉に種子が実ってそして一斉に落ちる。まさに、諸行無常のシンボルであります。その実が落ちてから一週間位は良いけれど、それ以上保存すると芽が出なくなる。だから実が生った時が大騒ぎで後は何も出来ない。こういうのは造林木としては取扱いが甚だ困難で計画が立たない。

そしてこの木は普通四十メートル位の大木になるのだけれど、はじめ、明るい場所に植えると沢山の枝が出てしまい、公園の木みたいになって、材木にはならない。芽が出て五、六年は暗い所に植えておかねばならない。暗くしておいて、大きくなってから日が当るようにしなければならぬ。こんな面倒なことは大面積の場所では不可能です。したがって今までラワンを造林して経営に成功した例は何処にもありません。

仕方がないのでオーストラリアの北部の湿潤地帯、パプアニューギニア辺りでやっている樹種

を沢山持つて来て、その中から適当らしい物を選んで造林しております。

さて、仕事を始めますと、助手を二人つけてくれて、さらにその下にレーバラーと称する現地の若い人を六人つけるといふことになり、九人の世帯になりました。京大に随分長くいましたけれど何もかも自分一人でやっていたのが八人も部下を貰うとその連中の世話が大変で、おまけに連中は、月給だけでは生活が出来ません。研究所のことですから、方々の山の中へ調査に行きまです。すると連中にはキャンプ手当が入りますから、山へ行こう、山へ行こうと言い出して用事も無いのに山へ引込まれるようなこともありました。

サンダカンの町は深い入江の中にあり、後ろに丘のある非常に綺麗な町で、長崎を小さくしたような感じですが。丘に上ると日本軍の掘った防空壕がある。人口は十万人位で、大部分は中国人で客家の連中が多い。あとは広東、潮州・海南その他です。

この町は戦争中に物凄くひどい目にあい、町全体が廃墟になってしまった。それは初め日本軍が進駐した時はよかったです、終戦間際に米軍の砲艦が港の中に入って来て、日本軍の陣地を砲撃し、そのまま引揚げた。そしてその後、爆撃が始まった。日本軍にしてみると占領はされてないし、爆撃隊に町から合図する者がいるという話があったりして今度は日本軍も町を砲撃し、両方から攻撃されて町は廃墟になってしまった。今の町は全部戦後になって復興した町でございます。さらに日本軍は豪州軍の進攻方向をこちらと予測していたのが裏目に出て、急遽兵力を西

海岸に転進致しました。この間はまさにジャングルでして殆ど人が住んでいない所である。マラリヤがひどくて住めなかったんだと思われれます。それで、その中を転進した時大変な犠牲が出て、日本軍だけでなく、捕虜にしていたオーストラリア軍も大分死にまして何千人以上の人が死んだと聞いています。現在はこのジャングルが全部切開かれて、その材木は大部分が日本へ来てしまひ、立派なハイウェイができております。

生活は気楽な所で、衣食住と言いますが、衣はシャツ一枚とパンツ、ズボンがあればよい。偉い人が来ますとネクタイを着用する。ネクタイさえブラ下げておけば王様が来てもOKでした。食はフンダンにあり、バナナは百円も買えば食いきれない。レストランがいろいろあって、食は問題ない。家の床は湿度が高くて地面には住めないので高床になっておりますが、雨季には床下が水たまりになり、カエルが住みついて、うるさくて安眠できませんでした。まだ水上家屋が残っておりますが、これは文化住宅であったと思われれます。なにしろ海水ですので蚊が発生しない。マラリヤの予防にはこれが最高であったと思われれます。

その間に重要樹種がわかってきた。それに沢山の種類の害虫がつきませんが、その中で特に造林に差支えるものをセレクトして重要害虫として、その生活史も大体わからせてきました。

その特徴を調べてみますと、これから先が問題だったのですが、非常に生息密度が変動します。始め物凄く発生してどうにもならんなど思っている奴が四、五年経つとパツタリいなくなる。い

なくなったのではなくて別の所で造林すると又大繁殖する。これの原因がわからない。要するに天敵が住みつくまで大繁殖するのであろう。天敵を含めた生物社会の完成と共にそれが下火になり、害虫ではあるけれどもまあ辛抱出来る形になるのであろうと予測しております。特に造林地に鳥の数が多くなるのが原因ではないかと思っております。

また、これらの重要害虫を調べると、皆特徴があつて、第一はシーズンがない。元来シーズンの無い国ですが、例えばドリアンは九月にしか食べられないように、多少のシーズンはあります。年中大発生する可能性を持つことが重要害虫の要件です。第二は幼虫が群集生活をする事です。一番の適例は後にスライドをお見せしますが黄色い蝶々が大発生致します。向こうでネムの木の仲間を造林したところ成育は良かったのですが、三年目位からこれが大発生してどうしようもない。葉が食われて山が丸裸になった。やがて蝶になった時、ヘリコプターで行ったら造林地全体が黄色い絨緞を敷いたみたいになつてた、という程に大発生します。これは日本のキチヨウとは別種のタイワンキチヨウでして、キチヨウは卵をポツポツと方々へ生みつけ、幼虫は群集生活をしない。タイワンキチヨウの方は一ヶ所に沢山産みつけ幼虫は群集生活をする。これが一方は重要害虫になり、他の方はならないのタイプカルな例であります。

六年の間にいろいろ面白いことがあります、向こうの人口は華僑が30%、マレー人が15%位、原住民40%、それ以外にインド、パキスタン、フィリピン人がおり、中の二つを合せると55%の



マジヨリテイとなり、マレーシャに入っている訳ですが、この中で一番多いのがドウソン族で、これがまた三十位の部族に分れており、その中のマジヨリテイをカダザンと言ひ、主に中央山地に住むグループです。私の助手も、このカダザン族で、私はいずれ日本に帰るのですから、これを後継者にしようと思ひ、日本に連れて来て、大阪府大農学部で一年勉強して、帰らせたいのですが、なんとか私の後をやってくれると思ひます。彼が始めて日本に来た時、銀座の辺りではサツパリ面白い顔をしなひ。ところが上野のアメ横に行くと目を輝かしてあれも買ひたい、これも買ひたいと言ふ。つまりあ、言う場所でない物を買へない習慣になつてゐるようです。丁度中央山脈に富士山より高い四一〇〇メートル位のキナバルという山があり、頂上はガラガラ岩場ですが、新宿のノッポピルの所へ連れて行くとキナバルの頂上みたいだと言つていた。

もう一人の助手はマラリヤに罹つて病院へ行つたあと自宅療養から出勤して来ない。どうしたと聞くと、シオンポリして、誰かに呪われている。頭がフラフラして仕方がない。その人が呪をかける度に気が遠くなると言ふ。要するにマラリヤの高熱でその後強い薬を貰つたので貧血を起してゐる。どうかすると立ちくらみしてひっくりかえる。それを皆、山の神様や、その他の伝説が災ひして人の崇りだと言ふことにしてしまふ。

行く前に日本の木材関係の商社の方に聞きますと、向こうから材木と一緒にいろんな物——蛇とか蠍——が入つて来る。材木の真中の空洞に入つてゐるのが出て来ると検疫で引掛つて荷役が

出来ず、船内消毒したり、大きな損害を出す。それで検疫には社員が付いて行って、検疫官に見付からぬよう足で踏み潰す為には丈夫な靴を履いて行く、と言うような話を聞きました。ところがサンダカンの郊外で昆虫を探していると同じように虫を探している人がいるので、何を探しているか尋ねると蠍だと言う。黒焼きにでもするのかと思つたら、彼はフィリピンの船員で、これを持って日本へ行き、検疫で発見されて足止めされることを望んでいる。さもなければトンボ帰りの連続で、せっかく日本に行つても上陸の機会もないと言うことです。「そんな事したら船長さんに叱られるだろうが」というと、「船長も向こうで探しとる。」そんな話がありました。

山で自然材を伐ると、大きな木ですから立派な林道を作らなければなりません。橋は丸太を敷いてその上に土をかぶせる。近くの川岸まで持つて来て水の上に落せばよい。海岸へ出たらサンダカンの港まで筏を組んで船で運ぶ。ここで貯木場に収納して日本の商社に売渡すのです。

こういう道を作るには相当な金が掛るので、地元の商人、主として華僑のシッパーが日本の商社からお金を借り、それで造作し、運んで売る。海は時々荒れ、筏がバラバラになる。木には夫々会社のマークが打つてあるのでそれを探しに行かねばなりません。中にはこつそり拾う奴もいる。ところが港の入口でバラバラになると大変なことになる。六人から八人抱えの撞木のお化けのようなものが波に乗つて海岸へやって来て水上家屋に衝突する危険がある。衝突すれば水上家屋は忽ちひっくりかえつてしまふ。その後この材木が来たからと賠償責任がかかつて来る。

だからこの辺でバラバラになるとあわててマークを消して行くと言う商売もある。

あとは写真を見ながら御説明申し上げます。

\*先程のネムの木の被害情況で樹がかなり裸になっています。タイワンキチョウの幼虫が群集して葉を食っています。これが親で、こちらが蛹です。このような葉を食う奴はまだましで、三ヶ月もすれば原状に回復します。

\*これはユーカリの仲間の木ですが、幹の周りに虫がトンネルを掘ってぐるりと輪を作り、2センチか3センチだけ残す。この中で蛹になる。コウモリガです。傷は回復することもあるが、トンネルは残って家具材には使えず、パルプ材に格落ちしてしまつて引合わない。ボクトウガも同じような害をします。

\*これはグメリナ、アルボレアという日本にはない木ですが、これにシロアリが付き物凄い害を与えます。シロアリは百五十種類ほどおり、一番悪いのがチチダシシロアリといって触ると白い乳を出す奴ですが、松が好きで、カリビヤ松、南洋杉が成長すると少ない所で30%、多い所で60%やられる。それで松はこのシロアリのために造林出来ない状態になっています。

\*これはミノガの類がアカシアの類の葉を食っている所ですが、これは少数派でネグレクト出来ます。

\*これは日本でアオスジカミキリという大変綺麗なカミキリムシの仲間で、南の方に多いのですが、ネムの類に付いて幼虫が群棲して大害を与えて木が枯れます。ただ此奴がアタックするのは植えてから十年位からソロソロ始まる。十年の間にこの木は相当大きくなる。それでこいつが付いて来たら切つてパルプにしてしまふという自転車操業みたいな造林をやっております。

\*これはカリビヤマツの枯れたところで、向こうでは菌にやられたという説もありますが、日本の赤松とソックリでザイセンチュウにやられてはいるらしい。

\*このような造林地は土地が広く、東京の環状線の中の面積の一倍半位あります。

\*いろいろ調べた結果アカシヤ、マンギウム *Acacia mangium* という木が成長も良く、材も良質でチークほどではないがその擬い物になる。しかも病害菌が少ない。それで今これを推奨株にして造林を始めております。

\*これは植えて二、三年ですが、冬がないので成長が非常に宜しい。成長の世界一がギネスブックに出ました。

(注)

以下コタキナバル周辺、キナバル登山、頂上付近、サンダカンの港と町の風物、地下に花をつけるイチジクなど珍しい動植物、オランウータン、ゴマントン洞穴、燕巢の採集、タワウ海

岸の鮎、南洋材の伐木現場その他の貴重なスライド多数を拝見しましたが、先生の御了承を得て説明は省略します。

以下、講師追記

(なお、当日省略した結論を追記しておきます。)

長い目で見たときには、東南アジアの問題は、華僑問題に集約される。清朝末期から多数の中  
国移民が東南アジアに移住し、それぞれの国で経済的な生活基盤を確保している。これらの華僑  
は、一部分は現住民にとけ合っているもの、完全にそうとは言いつれない。近代化がすすむ  
と共に、両者の生活の格差は大きくなる。このアンバランスをどうするか。局地的な暴動や、政  
治的の抑圧では片附くとは思えない。今から五十年、百年先になって、東南アジアが、いまの各  
国の政府の目指しているように、現在の欧州諸国のようになるのか、あるいは、その意志に反し  
て、東南アジア合衆国になり、その首都がシンガポールに置かれることになるか、それが課題と  
して残されている。

(京都大学 名誉教授  
ボゴール動物博物館客員研究員)